

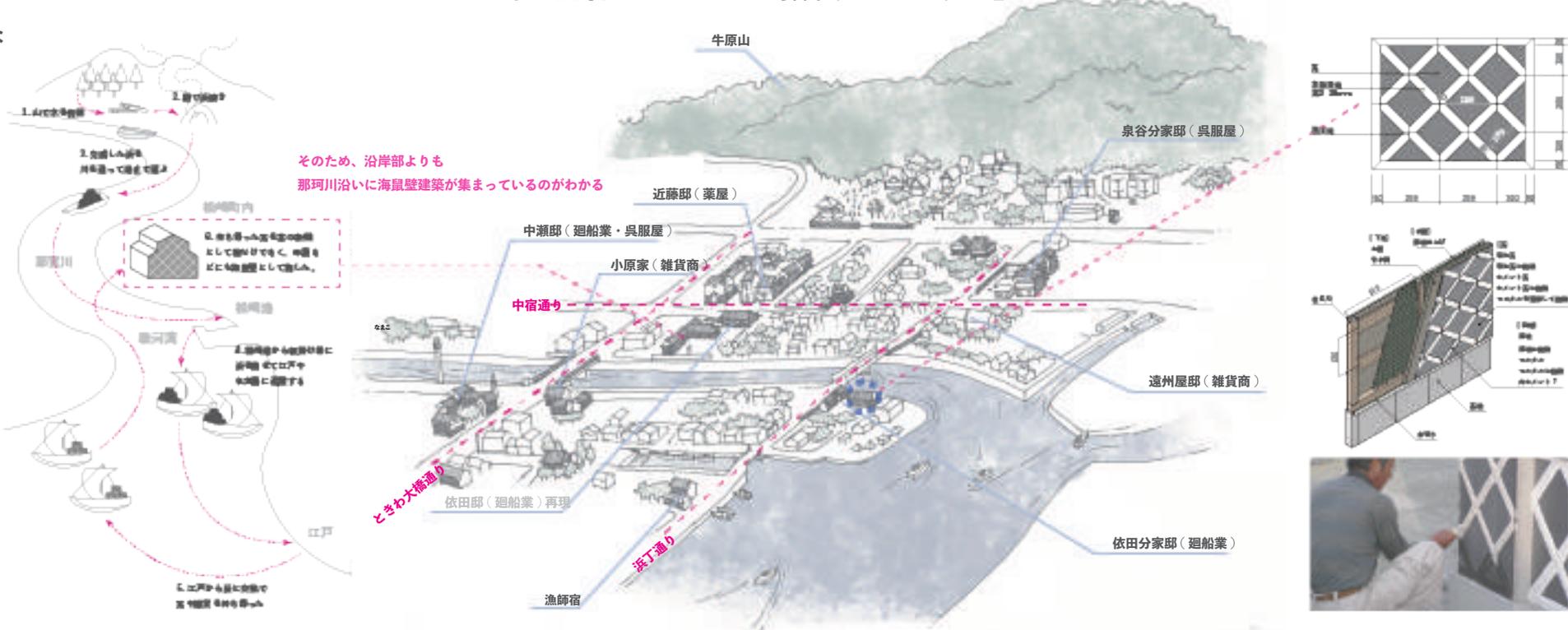
継ぐ、 ということ。

静岡県伊豆半島の南西に位置する、加茂郡松崎町松崎地区。ここには「海鼠壁(なまこかべ)」という伝統的なファサードを持つ建築群が数多く点在している歴史ある美しい町である。海鼠壁の連続面積の最も大きな民家である「近藤平三郎生家」は私の祖父の家であったからだ。しかし、この家を現在の私の祖父を最後に、今後継ぐ予定の者はおらず、また、保存方法や利活用の提案すらなされていない。同じようにそのほかの海鼠壁建築も同様の状況におかれているのである。かつて海沿いのこの街はかつて漁業や木炭産業、廻船業で栄えた。しかし今は、波の音が寂しくも町中に反響しているのみである。

松崎町松崎地区の衰退の流れを抑制し、これからの可能性を考えることで、この提案が変化への大きな起点となることを望む。そんな未来の松崎への設計である。



町の記憶としての「海鼠(なまこ)壁」



そのため、沿岸部よりも
那珂川沿いに海鼠壁建築が集まっているのがわかる

ときわ大橋通り

浜丁通り

Scale:L 成り立ち

炭を作って江戸や名古屋に運搬する廻船業の勃興により、海鼠壁に使う平瓦を大量に持ち帰る。

Scale:M 所在地

かつてのメインストリートだった「中宿通り」と「浜丁通り」、
「ときわ大橋通り」の周辺に海鼠壁建築が現存している。

Scale:S 作り方

平瓦と平瓦同士をつなぐ「目地」の部分
を漆喰で意匠を持たせたものが、海鼠壁。

町内の山や海



農村・漁村

小田原・鎌倉



かくれ里としての伊豆

海鼠壁建築の設立



メインストリートの形成

江戸・名古屋



交易の町として

空洞化



目立つ空き家

人口流出



国道136号線

中心地の再興



海鼠壁を起点とした動線計画

新たな交流人口



都心からのつながり

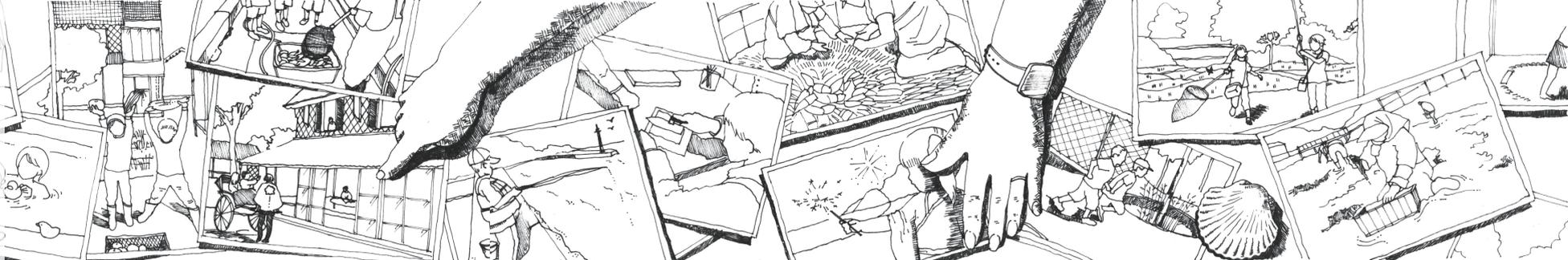
商いの変化

交通形態の変化

計画による再生

2拠点型の学校へ。

海鼠壁建築が新たな交流人口を創造する基点となり、活用することで保全への指針を提示する。長期滞在や移住者が利用できる施設である事・海鼠壁建築を利用する人が常にいる事・若年層の交流人口を積極的に増やす事が出来る提案が必要になる。そこで、「デュアルスクール」という新しい教育方針を設計の軸とした。デュアルスクールとは、2拠点型の教育を展開する、新しい学校のかたちである。2拠点の双方の教育委員会が提携し、両校間での出席日数を認可するもので、2016年より東京～徳島県美波町間で実施されている。参加者は、サテライトオフィスでの勤務が可能な両親とその子供達が短期的に移住することで実施され、子供達はその土地ならではの経験による、多面的な納涼を養う。歴史の過程で失われた松崎町と町外の交流を復活させ、町全体の賑わいを再興する。



町の記憶だった「海鼠(なまこ)壁」が、子供達の思い出になるまで



2020年現在の動線

国道136号線が完成し、町の中心地は東側へ移ってしまった。周辺には大型娯楽施設が立ち並び、そして次々と廃業している。



20XX年デュアルスクール開始後の導線

かつてのメインストリート沿いの海鼠壁建築を起点としてプログラムを分散配置することで、町中の動線が復活する。



20XX年デュアルスクールを展開した未来の導線

小学校だけでなく松崎中学校や高校へもデュアルスクールを実施し、さらに広範囲の海鼠壁建築が活用されることで町内全体が再興する。

3つの 海鼠壁建築。

現状ではデュアルスクール参加者が、移住先とその小学校のみを行き来するという関係性に限定されているが、本作品では地域全体での再興と海鼠壁建築の保全のために地元住民・観光客・デュアルスクール参加者の3つの交流軸が交わる際に必要な機能を検討する。かつての目抜き通りである、「中宿通り」「浜丁通り」「ときわ大橋通り」に面し、かつ授業等で活用することを考慮して、参加する小学生たちが通う松崎小学校から徒歩10分圏内の、中瀬邸・近藤邸・伊豆文邸の3つの海鼠壁建築を選択しプログラムを挿入する事で、機能の分散が徒歩や自転車等の移動による町の中心地を再興することを期待する。中瀬邸にはオフィスと学習塾、近藤邸には工房と食堂、伊豆文邸には温泉と宿を当て込み、海鼠壁建築の風景を傷つけない事を条件に、設計を行う。



1. 中瀬邸

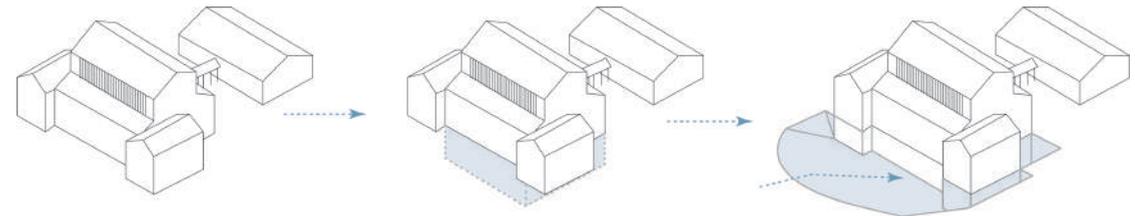
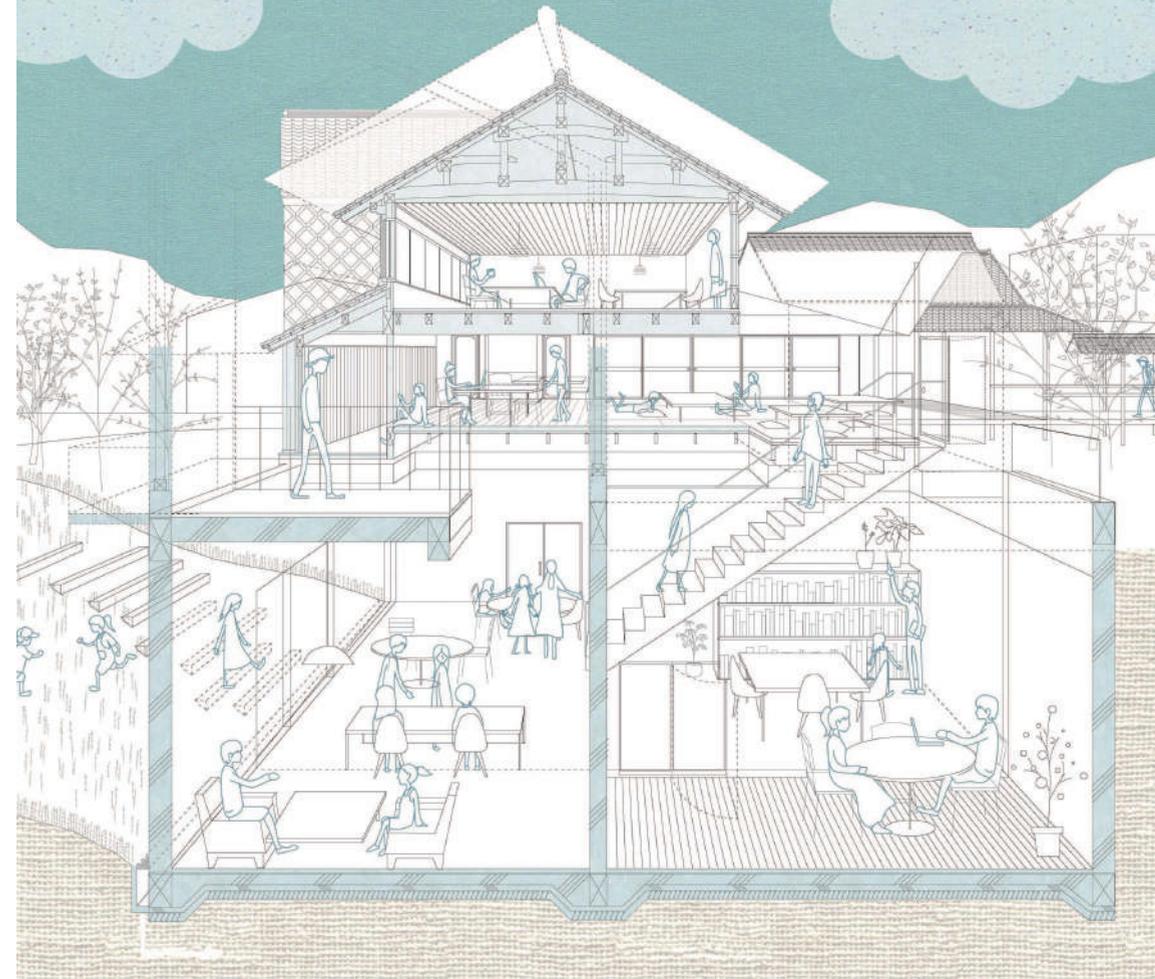
明治商家中瀬邸は、かつて呉服店と廻船業を営んでいた。母屋と東西の2棟の蔵が室内で連続している。

2. 近藤邸

近藤邸は、薬屋を営んでいた。南北の通りに沿って蔵が縦に連続し、なまこ壁通りを形成している。

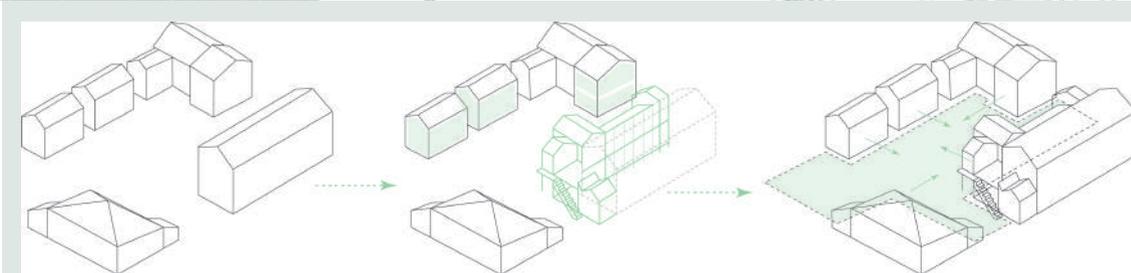
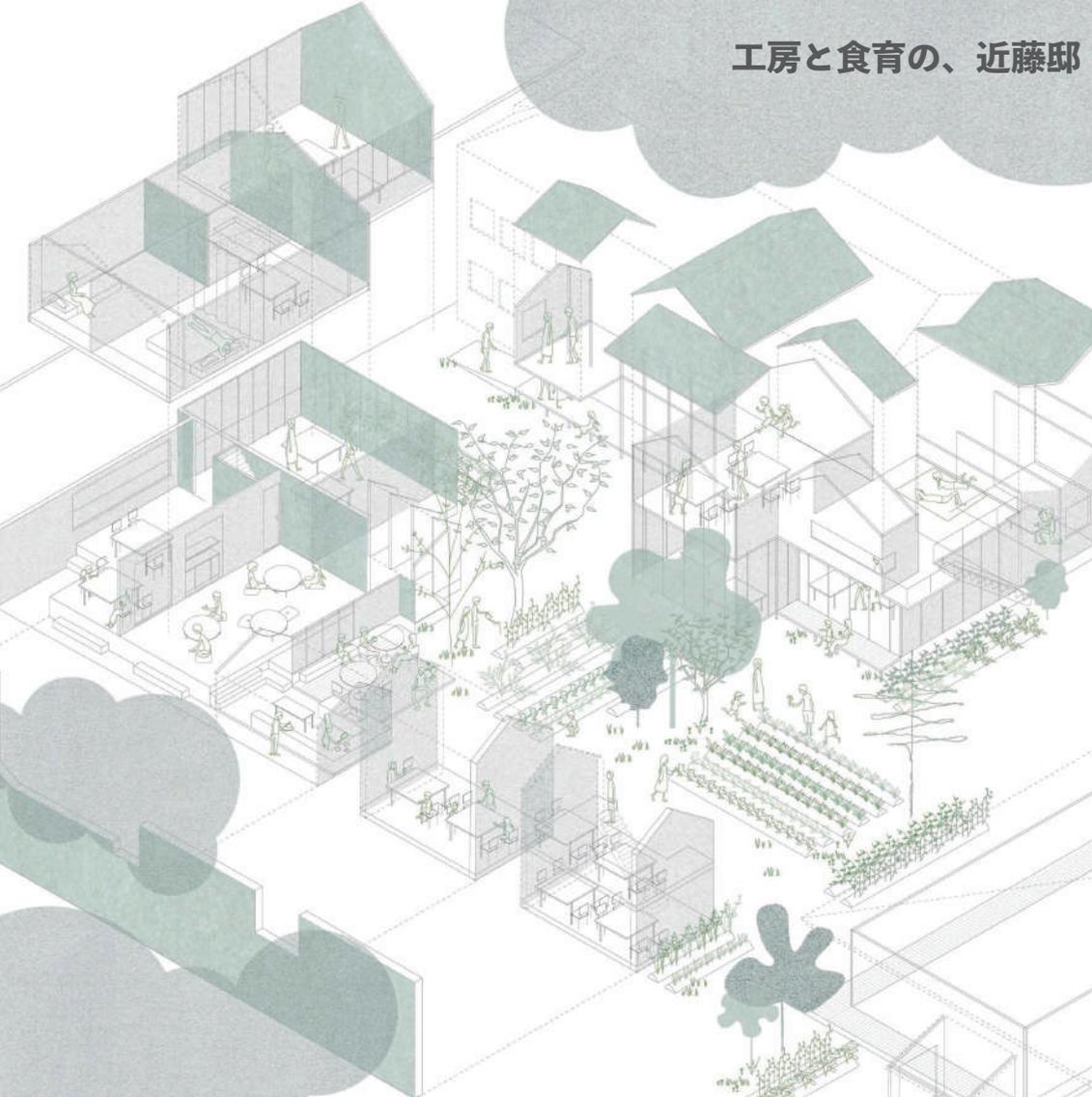
3. 伊豆文邸

伊豆文邸は、呉服店を営んでいた。庭の中心を囲むように蔵が配置され、温泉の配管が近隣にある。



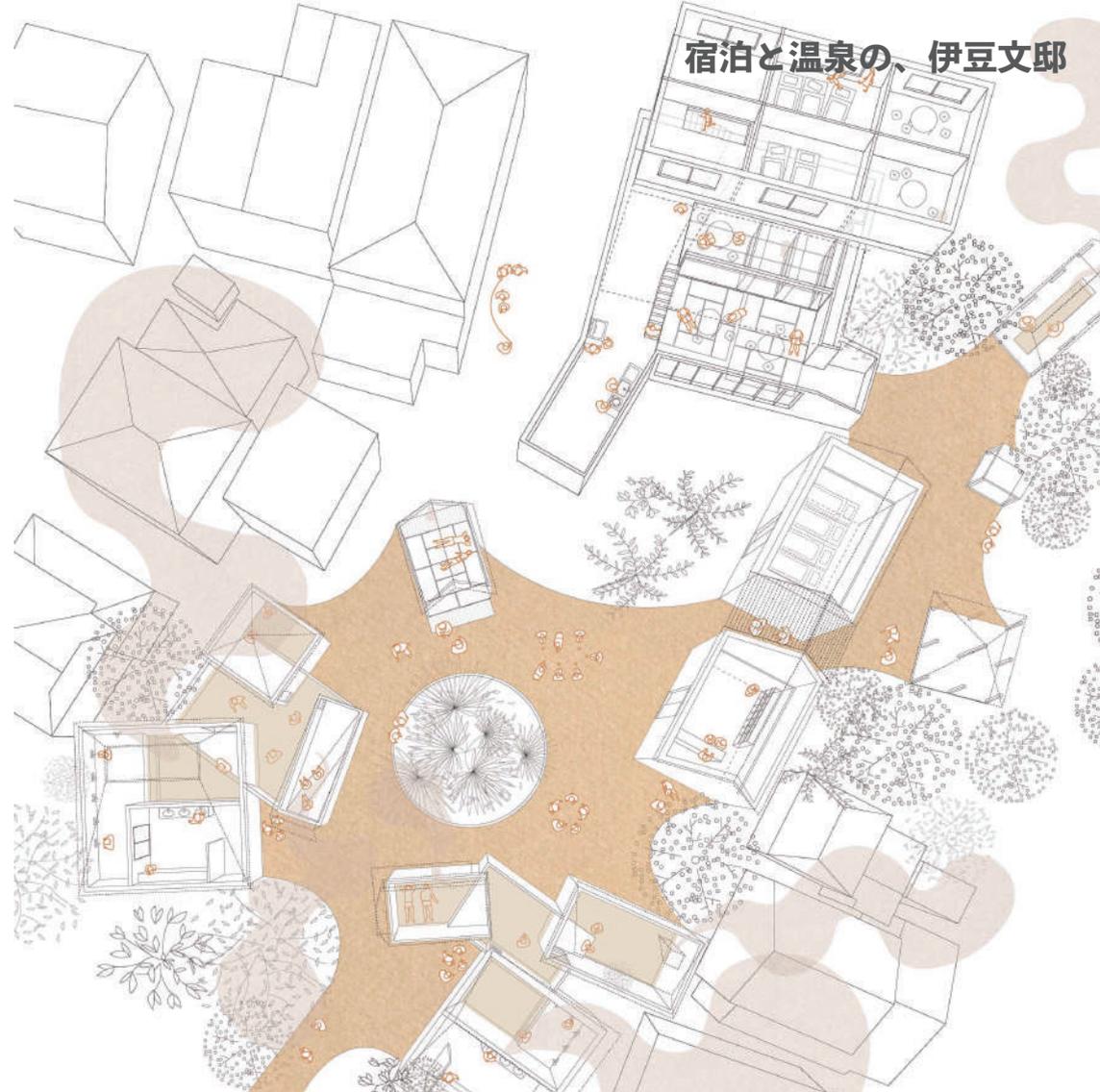
中瀬邸は東西の蔵が母屋を縦断するように横方向の空間が連続しているのが特徴である。増築部は中瀬邸の母屋部分および蔵を一度基礎から外し B1 階を設け、上下階の空間も連続させることで、様々なヴォリュームが1つの空間で連続する。地上面から傾斜した芝生が地下1階へ接続し、囲まれた討議場のような広場を作る。B1階にはデュアルスクールの総合事務所を設置する。

工房と食育の、近藤邸



近藤邸の母屋1階は食堂になっており、キッチンから土間を通じて席に配膳を行う。2階はその料理を作るオーナーシェフ一家の家である。蔵2棟には工房があり、小学校の特別授業で左官芸術を学ぶ。また、ショップや職人のレジデンスなどの増築部分は近藤邸の特徴である切妻屋根を連続させ、庭を囲むように作られている。全ての建物が中庭を介して視線が交わり、振る舞いを身近に感じりる。

宿泊と温泉の、伊豆文邸



伊豆文邸の母屋は1階書庫スペースになっており、各家々の本を持ち寄り、お風呂上がりの時間や寝る前に本を読む時間ができる。2階は子供達だけで宿泊できる寝室になっている。温泉の増築はかつてあった蔵を想起するように配置することで、それによってできた隙間や、木を避けるように配置されたデッキは子供たちが思い通りの遊び方に合わせて活用する。